

県中教研 美術部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 藪 陽介
題 字 金山 泰仁 先生

生活に生かされる美術

指導主事 藤田 みゆき

大晦日の私の仕事は、新年を迎えるために床の間を設えることです。掛け軸を日の出が描かれたものに掛け替え、普段より豪華な花を生けて飾り、干支の置物等、正月にふさわしい小物を置きます。作業自体は簡単ですが、心地よい空間にするには時間がかかります。全体のバランスがとれているか、少しずつ動かしては離れて見て確認するからです。毎年、面倒だからやりたくないという自分と、納得するまで美を追求したいという自分が葛藤していました。

昨年11月に参加した研修で、文部科学省の教科調査官が、美術と日常生活との関わりについて、ご自身の洗濯物の干し方を例に挙げて説明されました。洗濯ハンガーを水平に保ち、洗濯物の色や柄を意識して美しく干そうとすることや、お気に入りの物を買ったり飾ったりすること等、様々なことが美術との関わりに含まれるという内容でした。この話を聞き、床の間を設えることは、身の回りのものを造形的な視点で捉え、美しさを感じ取り、豊かな生活空間をつくりだすことだったのだと改めてその価値に気付くことができました。今回の準備も疲れましたが、これまでより楽しく作業ができ、大きな充実感を味わいました。

先日テレビ番組で、ある芸能人が自宅の一番お気に入りの場所として、クローゼットを紹介していました。服や靴について嬉しそうに話す様子や、使いやすさと美しさが調和した空間から、生活の中に美術が生かされていると感じました。

新学習指導要領では、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成を一層重視しています。指導する私たちは、授業の工夫・改善だけでなく、自らがモデルとなり、表現活動や美術作品等の鑑賞を楽しみ、美術を生かして心豊かな生活を創造している姿を生徒へ発信することも大切なのではないかと考えさせられました。

(西部教育事務所)

生きて働く力を育成するために

部長 藪 陽介

新学習指導要領の全面実施まで2年となった。

改訂の要点はいくつかあるが、その一つは、全教科の目標が3つに整理されたことである。(1)知識及び技能 (2)思考力、判断力、表現力等 (3)学びに向かう力、人間性等である。美術部会としては、来年度からの研究の構想において、それぞれの目標に1年ずつ重きを置いて研究を進め、新学習指導要領で目指すべき方向を探っていきたい。

また、今回の改訂の中に目立つ用語として「生活や社会」が挙げられる。これは、全教科において共通であるが、「学んだことをどう使うか」「どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るか」という視点がより重要になってきていることを示している。アドバイザー事業で招聘した文部科学省視学官の東良雅人先生や、IPU環太平洋大学副学長の村上尚徳先生の講義の中に、「ペットボトルのお茶になぜ和風を感じるのか」や、「飛行場で飛行機の尾翼が並んでいる様子を見てなぜ美しいと感じるのか」という問いかけがあった。もしも、美術的な視点(意識)が弱かったらそのようなことに全く注意を払わないかもしれない。しかし、それに気付くアンテナ(造形的な見方・考え方)を授業の中で培っておけば、まずそこに気付くはずである。そして、形や色彩などの視点を通してなぜそう感じるのかという理由を考えていくであろう。それこそが、現在求められている力なのではないかと考える。

私が継続的に行っているオリジナル題材に「サイン表示を考える」というものがある。実際に存在したわかりにくい案内表示板を引き合いに出し、どうすれば誰にでも正確な情報が伝わるものになるか改善案を考えていくというものである。部員それぞれのアンテナで、現代の社会に対応していく実践を研修していきたい。

(南・福野中)

東 部 地 区

富山市立興南中学校

本年度の研究大会は富山市立興南中学校で行われた。小島龍一教諭による「ノート表紙のデザイン ～ My 教科〇〇ノート～」の授業は、生徒が学習で使うノートの表紙のデザインを考えるもので、グループでの相互観賞が表現の構想を練り上げるのに効果的であるかどうかを研究の視点として公開された。生徒は相互鑑賞で付箋に班員の作品へのコメントを書いて貼り、その後の話合いで、自分の作品の構想を班員に語るなどして自分の表現したい主題により迫ることができていた。その後、自分自身の作品に向かうとき、友人の書いた付箋を読み返し、制作に生かしている生徒も多かった。



授業ではICT機器を活用し、授業前と授業後の生徒作品をデジタルカメラで撮影し、写真を並べてプロジェクターで投影して、その変容を分かりやすく表示し、指導に生かしていた。

授業後の協議では「教師の生徒への言葉のかけ方が前向きかつ丁寧で、生徒が意欲的に制作に取り組む雰囲気をつくりあげていた」「付箋はより大きいサイズのものを使う方が具体的なアドバイスが書けたのではないか」「班での意見交換の時間をもう少し取り、その話合いの中から出てくる気付きを掘り下げて、作品制作に生かすこともできたのではないか」等の意見が出された。

伊勢威知郎指導主事（東部教育事務所）からは生活や社会の中での美術の大切さなどについてアドバイスをいただいた。

講演会では文部科学省初等中等教育局視学官の東良雅人先生をアドバイザーに、「授業力向上のための講義と質疑」ということで、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成について講話があった。



研究授業で撮影した生徒の様子や、他の学校での事例等を資料に交えながら、新学習指導要領における3つの柱が「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」であることを分かりやすく解説された。

特に美術では、教科の本質に迫るための主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善がなされるべきであり、「造形的な見方・考え方」がしっかりと働く授業とは、生徒が造形を豊かに捉える多様な視点を大切にした授業である。言いかえると次の二つの視点①木を見る視点…対象などの形や色彩、材料や光などの造形の要素に着目してそれらの働きを捉える視点 ②森を見る視点…対象などの全体に着目して造形的な特徴からイメージを捉える視点が意識されている授業であると話された。

その意味でも、今回の授業は生徒の見方や感じ方をお互いの気付きの中から深めることのできるタイムリーなものであった。

白井 理一（中・雄山中）

西部地区 射水市立射北中学校

古澤さゆり教諭（射・射北中）により、指導と評価の一体化を目指す授業が行われた。「心地よい形」という石彫による立体表現を用いて、自らが「心地よい」と感じる形の実現に取り組む題材である。指導案検討の段階では、射水市部会の会員がそれぞれ試作品づくりを経験した。このことから生徒が制作時にどのようなことを困難に感じるか予測した検討を行うことができ、本時での指導に活かされていた。

生徒は前時に表現意図をまとめたワークシートを利用し、粘土でつくった試作品についての話し合いを行った。その後の制作では、アドバイスを受けて形を大きく変えた生徒や、自分の制作意図を確認し今の形を大切に制作を進める生徒が見られた。ワークシートの工夫により、生徒は自分の考えをしっかりと振り返ることができ、意欲的に制作に取り組んでいた。



また、生徒の自己評価や構想の深まりを記録に残すため、iPadが活用されていた。ICTを活用することにより、生徒は構想を練る際、相互鑑賞前後の形の変化を映像で確認することができ、教師も変容を評価に活かすことができる。指導と評価の一体化を図るために有効な取組であった。

遠藤雪代教諭（高・高陵中）により、主体的に楽しんで取り組める、魅力ある題材の開発を目指した研究発表が行われた。

iPadのコマ撮り専用ソフト「KOMAKOMA」を利用し、4人1班で30秒程度のアニメーション制作を行う授業の実践が映像と共に紹介された。生徒の意欲を高めるため、5月の校外学習において、「デザイン・あ」展の鑑賞を実施した学校行事を利用する工夫も紹介された。制作の見通しをもたせるワークシートの工夫や、1年生でも平易に扱えるコマ撮り用ソフトの利用が主体的な制作に取り組ませるために有効な手立てであると示された。

さらに、絵コンテ制作、撮影・動画制作を班員が協働して行うグループ作業のため、「他者と対話して作品をよりよくしていくこと」や、「他者と協働して課題を解決していく力を育てること」が期待される取組であると示された。

部会協議では、ICTの活用と評価の仕方などについて活発に意見交換がなされた。

藤田みゆき指導主事（西部教育事務所）から、研究授業について、

- ・題材の設定を含めた指導計画の工夫について、第3学年においてより深く自分と向き合うことのできる題材を設定することが学習意欲の向上につながっている。
- ・話し合い活動について、どの場面が有効であるのか、何のために話し合いを行うのかを考えることが大切である。
- ・指導と評価の一体化について、ICTを利用して制作過程を記録することで、教師の手立てが生徒への指導にどう活かされているのかを確認することができる。

と助言をいただいた。そして研究発表について、「学ぶことに興味をもたせるには教師の創意工夫が必要であり、制作への見通しをもたせることが主体的な学びにつながる」「協働の場合、一人一人に『自分が携わっている』と意識させる工夫が必要である」と助言をいただいた。

最後に、理事である大坪剛先生の「美術には学校を変える力がある」との言葉を胸に、本大会での研究を通して得られた成果と課題を今後の授業研究に活かしていきたい。

濱田 信子（氷・西條中）

砺波地区中教研美術部会 砺波地区中学生美術展

砺波市、南砺市、小矢部市の3市合同で、毎年「砺波地区中学生美術展」という行事を行っている。今年は12月15日・16日に南砺市文化創造センター（ヘリオス）にて開催した。今回が27回



目になるが、回を重ねる毎に生徒たちの作品のレベルが高くなっていることを感じる。特に美術部部門では、50号サイズの大きな絵画作品や細かな作業をコツコツと積み重ねて制作されたであろうデザイン作品や立体作品、ひと抱えもありそうな大きな立体作品まで、熱のこもった作品が数多く見られた。

今年の美術展は、砺波地区の16校すべての中学校から、一般部門70点と、美術部部門101点の、合計171点が出品され、2日間の会期中に、およそ350人余りの来場者があった。中学生も多く来場しており、他校の作品を鑑賞して、「どうやって制作したのか」とか「自分がない感性だ」などと、小声で話し合う場面にも遭遇した。生徒にとっても、お互いに刺激を受けられる貴重な機会となっていたのではないだろうか。

16日の午後から、同会場にて表彰式が行われた。入選作品の中でも特に優秀と認められた作品が「特選」に選ばれ、約60名の生徒たちが表彰された。また、賞状授与の後、元砺波地区中教研美術部会の会員でもある小野美恵子先生による講評会があり、作品のよところや、今後の制作へ示唆をいただいた。

今年度の砺波地区中学生美術展も、盛況のうちに幕を閉じた。

高田 修男（小・津沢中）

新川地区二市一郡中教研美術部会 6月12日 実技研修会

毎年6月に下新川、黒部市、魚津市の二市一郡中教研美術部会を設定し、授業実践や題材の紹介等をして、各自の授業改善につなげている。

新学習指導要領に、A表現には、体験させたい主な材料として、水彩絵の具やポスターカラー絵の具に次いで墨が取り上げられている。また、B鑑賞には、日本美術と諸外国の美術や文化との相違点や共通点を考えさせる視点として、日中の水墨画の比較等が出てくる。そこで今年度は、黒部市で活動をされており、水墨画に造詣の深い川端豊次先生を講師としてお招きし、水墨画の実技研修に取り組んだ。

まず写形（具象画）や写意（内面の表現、抽象画）の表現の説明、伝統的な濃淡表現や基本のスケッチを大切に表現していくこと等、水墨画の基本的な用法や表現のお話をしていただいた。次に、先生の作品をお手本にして、白描法や没骨法、滲潤法、渴筆法、白抜きといった技法を用いて、実際に描いてみた。

現代に合うような表現、自分が目指す表現を追求するために塩



や白抜き液剤、界面活性剤を用いること等、これまで考えていた水墨画の技法とのギャップに驚かされた。水墨画は、技法習得や道具の準備が大変であるといった思い込みがあり、題材として取り上げることに難しさを感じていたが、今後はもっと気軽に、身の回りにある和の表現として取り入れられるように授業の工夫をしていきたい。

川端先生から教えていただいた「まずは体験すること、やってみること」という姿勢から始め、そこから新しい表現に発展させていくのも方法の一つでないかと気付かされた。先生の新しい表現への挑戦や工夫への姿勢をよい手本として、授業力の向上に努めていきたいという思いを強くした。

澤田 良子（黒・高志野中）